



「可能性を捕まえる」

経営学部 4年
成田礼子

皆さんは「可能性の獣」というをご存知だろうか。想像によって育まれる可能性の獣、ユニコーンは、捕まえようとしても弾猛で生かしたまま捕らえることはできないという。しかしその可能性(ユニコーン)を捕まえようともせずに、離していいのだろうか。危険でもチャンスがあるなら果敢に挑戦してみるのもいいのではないか。これは大学4年生となり、特に不便なく大学生活を終えようとする私が、唯一学生生活で後悔していることの記録である。

私は1年生の時から、経営学部にも馴染めなかった。漠然と、これじゃない違和感があり、1年生の春から経営学部の人々がほとんどいないような授業ばかり一人でとり、我が道を進んでいた。しかし1年生のときは、それでも学びたい学問についてあまり実感していなかった。

転機が訪れたのは大学2年生の時。春に履修数の関係で無理やり詰め込んだ月曜夕方の基礎科目の授業。その授業で私は衝撃を受けた。20人に満たない履修生、少なく、さらにたがいの顔も知らない学生同士が、意見を交わし、時には先生とも意見を交わす超参加型授業。ただ知識を得るだけでない、得た知識から自分の考えを再構成していく、濃密な90分の授業に夢中になった。

私は先生の授業をもっと受けたいと思い、2年の秋に文学部への転部を考えましたが、挑戦しなかった。このとき、転部試験を諦めたことが、私の唯一の後悔である。

一言言い訳をすると、すでに私は2年生の春からゼミに所属しており、所謂ガチゼミというところで忙しかったのと、ゼミに対し申し訳ないと思ったのだ。しかし本当のことを言えば、新しい環境へ行くのが怖かったのだと思う。交友関係や学内での体験がリセットされてしまうのではないかと、勇気がなかっただけなのだ。そして私は転部を諦め、普通の経営学部の学生として授業に出て、普通の成績をとっている。

ただ、4年生となり卒業を間近に控えたいまでも思い出すことがある。転部を諦め3年生に上がった私は、先生の授業に相変わらず一人で参加していた。先生の授業で他学部の学生がとれるのは基礎科目と連関科目の計2つしかなかったため、経営学部の私が受けられる最後の授業であった。

その法哲学の授業の最後の日。「2年間とってくれてありがとう、もう授業はないけれどこれからも頑張ってる。」

先生が私にかけてくれた言葉を私はずっと一生忘れないだろう。先生からしたら、数多くいる学生の一人で、よくある送別の言葉だったかもしれない。だが私はそのとき、なぜもっと先生の授業を受けられないのだろうか、と寂しさを感じた。それと同時に、なぜあんなとき転部しなかったのだろうか、転部したらもっと授業が受けられたかもしれないのに、と後悔した。そして今も後悔している。

誰でもきっと、大学生活のなかでやりたいという事とぶつかるだろう。私は、悩んだ末に敷かれたレールを進む道を選んだ。でもきっとこの先の人生で思い切ったチャレンジなんてできない。だから大学生活の中でくらい思い切って挑戦してみてもいいのではないかと思うのだ。ユニコーンは弾猛で捕まえられないかもしれない。でもそれを掴むために一生懸命になれる時間が一番あるのは大学生なのだ。だからこれを読んでいる人に、悔いのないよう可能性(ユニコーン)に果敢に、立ち向かってほしい。

● 講 評 ●

思い切って挑戦することができなかったという後悔と率直に向き合うことは、勇気を必要とすることです。それに、他学部の授業に、2年間ひとり参加し続けたことそのものが、充分にりっぱな挑戦ではないでしょうか。これからもユニコーンとの出会いがたくさんありますように。



「日本語で繋がる世界」

法学部 3年
高品万紀子

「日本の文化、日本の人は素敵だと思います。」私の顔を見て彼女は笑顔でそう言った。私はその言葉によって心から嬉しく、そして誇らしい思いを抱いた。

私はこの夏、大学3年生として迎えた夏休みにウズベキスタンに行ってきた。このことを話すと多くの友人が「ウズベキスタン?」と驚き気味に聞き返してくる。改めて言おう。私はウズベキスタンに行ってきた。ウズベキスタンは中央アジアに位置する旧ソ連国の一つである。渡航した目的は法政の提携校の大学を訪問し、そこで日本語を学ぶ学生に会うことだった。「日本語」って誰が使っているだろう。もちろん「日本人」だ。日本人が日本で使っているマイノリティーな言語、それが「日本語」だ。なぜそんな言語を遠く離れたウズベキスタンで学んでいるのか、私はとても不思議に感じたのだ。国内就職が難しいから日系企業に就職するためのなのか。実際に聞きに行くことにした。

実際に会った日本語を学ぶ学生たちはとても礼儀正しく、優しい人達だった。そして私が「なぜ日本語を学んでいるの?」と問うと、口を揃えて「日本の文化が好きだから。」と言うのだった。私は法政大学のプログラムで日本語クラスや遠足を行う2週間のプログラムで訪れる学生のサポートをするボランティアや、日本に興味を持つインドネシアの中高生との交流などを行ってきた。

法政大学はたくさんの海外の大学と提携を結んでおり、法政に来ている大学生もたくさんいる。今学期から留学生の日本語クラスでサポートボランティアをしているが実に様々な国から人が来ているのだ。たくさんの外国人に出会った。そして、たくさんの友達ができ、しかも、世界共通語の英語ではなく、私たちの「日本語」によって。

「言語」はただの会話ツールではない。その国を表現し、受け入れ、感じ、理解するために最も重要なものなのだ。「日本語」を学ぶ学生が増えるほど、日本は愛され、日本が愛されるほど「日本語」を学ぶ学生が増える。日本人に生まれた人間としてこんなに嬉しいことがあるだろうか。法政大学はその場を提供し、私自身の可能性で、留学生や外国人の可能性を広げてくれている。「グローバル」が現代社会に必要な不可欠なキーワードだ。その言葉とは対照的に感じるが、実は我々の「日本語」にも日本をグローバルに、学生をグローバルに考え、感じさせる可能性が秘められていると思う。

● 講 評 ●

「グローバル」=英語のような単純化した世の風潮を一蹴し、本当の意味で日本がグローバル化してきていることを感じさせてくれる。グローバル化は母語の大切さ再認識させる。大学生らしい行動力でバランスのとれた文化観、言語観を得る過程が語られている。



「過去の可能性」

法学部 1年
深津響

「可能性」と聞くと多くの人はまだ見ぬ未来を思い浮かべるだろう。希望にあふれ、光輝く未来。自分は何者にだってなれる。そう思わせてくれる、パワーのある言葉だろう。しかし、私は可能性から未来について考えるのではなく、過去の自分の可能性について述べていきたいと思う。

未来の自分がどの様な姿であるのかは、他人には勿論、自分にだって想像することはできない。今いる場所から無数に伸びていく道、それこそが可能性だろう。無限にある道の中から一つを選び歩いていく、そうして私たちは未来に進んでいくのだろう。そして、今の自分の在り方は過去の自分が無数にある道に直面し選択した結果なのだ。

今を考え、自分がたどってきた道を振り返るとき、「本当にこの道でよかったのだろうか。他の道を選んでいればもっと輝かしい今があったのではないか。」

私はこう思えずにはいられないのである。決して今の自分が不幸というわけではない。ただ私が貪欲なだけかもしれない。しかし、私は過去の可能性に期待せずにはいられないのだ。もしかしたらもっと良い今があったのかもしれない。必ずより良い結果になることなどないにもかかわらず。そして、空想と現実の狭間でわかまわりを抱えたまま今を過ごしていくのである。私はかつて自分が手にしていた可能性に囚われているのだ。まさに可能性の呪縛である。

しかし、私は幸いにして呪縛から解かれる術を知っている。それは今の自分を肯定することである。今と異なる都合のいい自分を想像するのではなく、今ある自分を見つめるのだ。当たり前のことすぎて見逃してしまっているだけで、私たちは皆過去の可能性などよりも価値のあるものを持っているのである。私は「人」という宝物を今という中に見つけ出した。日ごろ何気ない会話をする友人、私を啓蒙してくれる教授、出会ったすべての人が唯一無二のかけがいのない財宝なのである。私は大学に入学し出合いに恵まれたからこそ、このように思えたのだろう。そして、出合いに恵まれたのはかつての自分が選んだ道のおかげなのだ。

私は「人」を見出したが、人によって何を見出すかはそれぞれだろう。過去の可能性などに囚われているのは私ぐらいなものかもしれない。しかし、もし囚われている人がいるのなら今の自分と向き合い、見つめ直してもらいたい。そうすれば過去の可能性は苦しめる負債ではなく、力を与えてくれる資産となるだろう。

● 講 評 ●

「あのときもし…だったら」という思いにかられたことがあるという人は少なくないでしょう。過去の選択と偶然とすべての積み重ねのうえに今があると、感謝できるようになったら、過去に囚われることがなくなる、というこの文章、迷える多くの学生に読んでほしいものです。



「ブラジルに行ってきたら」

現代福祉学部 3年
山田早紀

それはまるで初めてコンタクトを付けたときのようにわたしの世界は拡大した。

最近わたしは、自分の可能性に、おっかなびっくり気づき始めた。私みたいな大学生は、思っているよりも、何でも出来ると思ったのである。

大学1年の夏に、カナダに1ヶ月語学留学した。それまで私は、留学して英語がペラペラになりたい、という中学の頃からの夢に向けて突き進んできた。とにかく「ネイティブスピーカー」と話したかった。だが、カナダでブラジル人に会ったことは、私を構成する一粒一粒の粒子まで、大きく変えた!

今まで、地球の裏側にいるらしい、サッカーが得意らしい、危ないらしい、という情報だけでブラジルを見してきた。そもそも、あまり見ていなかった。だが、実際に話してみると、独特の陽気さがあり、それはアメリカ人や、メキシコ人、台湾人、スペイン人の、それぞれの陽気さとは全く違った。比べようもない、別物なのである。私はすっかり魅了されてしまった!以来、ニュースを見ても、スーパーに行っても、あれ、ブラジルに関することってこんなにあったんだな、と気づいた。アンテナを立てると、意外にもブラジルは私に降り注ぐ。そこに、猛烈な面白さを感じた!それからは、カナダから帰りブラジルに住む友達と定期的に連絡をとっていた。が、なんだか最近つまらない。海外旅行でもしようか、と思うようになった。アジアも行きたいしヨーロッパも行ってみたい、と私がボヤいていた時である。

「ブラジルに行ってみたら」

これを言ってくれたのは親友か。誰だっただろう。本当に心配してくれる親はそんなこと言わないだろうし、私を分かっているからこそ、私自身が気づかなかった願望を言葉にしてくれたのか。はたまた適当に言ったのかもわからない。それでも、私の人生を大きく変えた。

ああそうだ、ブラジルに行けばいいんだ!そうして、すぐにチケットを調べ、計画を練って大学2年の春に飛んだ。自分は、本当にひとりで地球の裏側に行けたんだな、と驚いた。もちろん、お金や時間があれば、北極にでも行ける「だろうな」、見たことが無いけど、砂漠はあるん「だろうな」と人々は考える。だが、本当に行けると、ビックリするのである!ああ、ブラジルってあったんだ!

そしてブラジルから帰国した今、わたしはポルトガル語を独学で勉強している。かねてからの夢であるアメリカ留学では、ブラジルの言語と文化を獲得しに行く。そのような未来を

中学生のわたしはまだ知らない

● 講 評 ●

語学留学をきっかけとして、自分の世界が広がっていったことが生き生きと描かれていると思いました。友人の何気ない一言が、心の奥底にあった自分の気持ち明らかにしてくれた、大学とはそのような出会いのある場所なのだということが伝わります。